

8月24日は薬害根絶の日

薬害根絶は私たちの薬局の目標です。

1999年8月24日、厚生労働省は薬害エイズなど悲惨な薬害の発生を反省し、薬害根絶のために最善の努力を重ねていくことを国民に対し誓う決意のもと、厚生労働省の敷地内に「誓いの碑」を建立しました。

この「誓いの碑」を薬害根絶のシンボルとして、国や製薬企業が国民一人ひとりの命を大切にしているか、医薬品の危険性に注意を払い適切な対策をとっているかなど、絶えず厳しい監視の目を向けていくことが私たち国民の重要な役割です。

この夏も焦点は、薬害肝炎と薬害イレッサ



●●● 薬害肝炎とは ○●○

薬害肝炎とは、出産・手術などの出血時や新生児出血症などに止血剤として使われた血液製剤によって多くの方がC型肝炎にかかってしまった事件です。肝炎感染のために、それまでの生活が一変してしまった方、つらい治療を余儀なくされている方、経済的保障がないため治療も出来ない方、夢を諦めざるを得なかった方、多くの被害者がこれまで福岡・大阪・東京・名古屋で裁判を闘ってきました。9月7日には、仙台訴訟判決も出ます。国と製薬会社が責任を認めること。ウイルス性肝炎の治療体制を整備すること。治療に伴う経済的負担の軽減など、私たちはこれからも恒久対策の実現を求めて活動します。



○●○ 薬害イレッサとは ●●●

イレッサは、イギリスに本社を置くアストラゼネカ社が開発した肺がん治療薬です。「副作用の少ない画期的な夢の新薬」として大々的に宣伝され、2002年7月に承認申請後6ヶ月という異例の早さで世界で初めて、日本で承認されました。ところが、承認直後から死亡を含む重篤な副作用を発生させました。

現在までに706人の副作用死が報告されています。被害の救済を求める損害賠償請求訴訟が始まっています。医薬品の承認制度のあり方、宣伝広告・販売のあり方、医療従事者と患者への情報提供のありかたが問われています。

こんなにあった日本の薬害

世界中のどこにもこんな国はありません。

1956 ペニシリンショック

1961 サリドマイド

催眠鎮静剤サリドマイド（日本では胃薬とも配合）を妊娠中に服用した母親から手足や耳に奇形をもった子どもが生まれた。被害児は世界で数千人。日本約千人（認定数309人）。日本では、61年のレントツ博士（ドイツ）の警告にもかかわらず、その後9ヶ月間も販売を継続、被害が倍増した。

1965 アンブルかせ薬

1967 ストマイ 抗結核薬ストマイで聴力障害などが多発

1970 コラルジル 心臓病薬コラルジルによる肝障害。被害者千人以上

1970 スモン

60年代から下肢の麻痺や視力障害などの末梢神経障害（64年にスモンと命名）が多発。70年に整腸剤キノホルムが原因とされるまでは、ウイルスによる伝染病と疑われ多数の自殺者も出た。被害者約12000人。キノホルムは第二次世界大戦前からアマーバ赤痢の薬として使用され被害も起きていたが、国は39年に劇薬指定を解除した。製薬企業も35年バロス警告（アルゼンチン）を無視し、戦後整腸剤として大量販売した。

1971 クロロキン 抗マラリア薬クロロキンによる視力障害。被害者千人以上。

1975 クロラムフェニコール

抗菌剤による再生不良性貧血が7年以上にわたり発生

1983 薬害エイズ

エイズウイルスにより汚染された非加熱の凝縮血液製剤により血友病患者約1800人がHIVに感染した。82年にエイズの血液感染が疑われた時点で非加熱製剤の禁止していれば被害は防げた。83年アメリカで加熱製剤が使用されるようになってからも、日本では85年まで二年四ヶ月も非加熱製剤の使用を継続し、その後の回収も不十分だった。

1993 ソリブジン 抗がん剤との併用で死亡者多数

1996 ヤコブ病

脳外科手術に際に使用したヒト乾燥硬膜（ドイツ）がプリオンに汚染されていたため、70名以上がヤコブ病を発症し、植物状態の後に多数が死亡。アメリカでは87年にこの製品の輸入を禁止したのに対し、日本での使用禁止は10年遅れの97年だった。